

夜の雨の足をまのぶ藁屋の軒は、おのづから閑居の思となりて、是發心の中立なり、崩たる忠彌が槓の戸の雫を拂ひ、奥村八郎右衛門油井正雪落合、二ツ三ツの咄も四方山の梢に渡りて、飛花落葉コトワリ断を告る恭といふ者こそ勇ましけれ、いざと八郎右衛門碁石をとりて、正雪をす、む、丸橋もいさみて見物しけるが、丸橋わたらば錦中や絶なんと諷ければ、正雪渡りを引、八郎右衛門忠彌が袖を引て、めいわくの謠かなと制しけるや、有て忠彌又首かき切てと諷ふ、正雪切ける、八郎右衛門忠彌をはたと白眼て、日頃にも似合ぬ忠彌がふるまひかな、盤上の助言再三なるぞや、おとなげなくも某をあなどり給ふか、一命は毫毛よりも輕し、名は萬代に残るものぞ、一寸の虫にも貳尺三寸の魂ぞと、刀に手をかける、忠彌は色をもかへす尻打た、いて、ぎやうくしの八郎右衛門どのと興じける、そのまゝ、正雪中に立て、忠彌を白眼て奥村に向ひ、只今の一手を用るにこそあれ、畢竟碁なり、是ほどの事に遺恨なるべき、唯打給へと碁盤押直し打立けり、半過たる碁に、正雪十四五目も勝なるべきを、打損じて三目正雪負ぬるにぞ、奥村も心とけて、閑は時の忠なりと笑に成ぬ、去ばこそ油井は、古今の勇士、智仁を兼たる武士のや、たけ心ぞおしまるゝ、そもそも此の八郎右衛門、真先に一味すべき身の、其の沙汰をのがれぬる事は、此の口論故なりとかや、

〔玉露叢 二十〕寛文九年閏十月廿日ニ、御城ニ於テ圍碁并ニ象戯ヲ仰セ付ラル、依テ見物ノ爲トシテ、松平讃岐守、井伊掃部頭、松平美作守登城ナリ、黒書院ニ於テ卯ノ刻ヨリ始ル、本因坊先置テ三知ト打、道策先置テ三哲ト打、道策十三目勝、門入先置テ知哲ト打、門入四目ノ勝、略○中算知ト本因坊、御城ニ於テ勝負ツカズシテ、土屋但馬守宅ニシテ打ツグ也、算知九目ノ勝、

〔玉露叢 二十一〕寛文十年十月十七日ニ、圍碁ヲ仰セ付ラル、依テ井伊掃部頭、見物ノ爲ニ登城シテ、黒書院ニ於テ卯ノ后剋ヨリ始ル、